統一思想要綱と原理講論に使われる心情という意味の比較考察

心情に対する心理学的研究に基づいて

ジュ・ジェワン(鮮文大学校)

1. はじめに

統一思想要綱は心情を「愛を通じて喜びを得る情的衝動」で定義する。[1]　ところで筆者の観察によればこの定義は統一思想要綱の土台になる原理講論で使われる心情の意味と正確に一致しないようである。筆者はこの観点から統一思想要綱でいう心情の意味と原理講論中で使われる心情の意味を比較しながら、両者を包容することができるように心情の概念を新しく理解してみようと思う。

統一思想要綱で上のように定義されて使われる心情はまず韓国文化で一般的に通用する意味としての心情と違う。韓国語辞典に出ている心情の正義を調べれば、心情というのは「胸中に抱いた考えや感情」「心が起こされた状態と状況」「気立て（心)」「気を遣う態度」または単純に「心」等を意味する。このように定義される心情は「愛を通じて喜びを得る情的衝動」との違いが分かる。また後述するように人間の心を研究する代表的学問の心理学でも韓国人が使う心情という単語を「愛を通じて喜びを得る情的衝動」を意味すると見ない。それなら統一思想要綱に定義して使っている心情というのは韓国社会で通用する本来の意味でない代わり特殊な意味を与えられた一つの専門用語(technical term)で使われているということになる。

2. 韓国文化の中の心情の意味

それならば原理講論に使われている心情の意味は韓国文化の中で通用する意味に近いのか、そうでなければ統一思想要綱で使われる専門用語の意味に近いのか?この質問に答えるためにはまず韓国文化の中で心情という単語がどのように使われているのかに対して、より深く理解する必要がある。なぜなら原理講論は韓国文化の中で、韓国語で表現されて初めて出現したためだ。このために韓国人の心情を研究した心理学者の分析を参考にしてみよう。

最近韓国人の心理に対する土着心理学的研究によれば、[2]　心情というのは「動いた心と動いた心の情況」と最も一般的に定義されるが、この時「心」というのは英語の mind より

---

[1] 統一思想研究院、統一思想要綱（ソウル：成和社、2003)、58.

[2] チェ・サンジン、キム・キボム、「韓国人の心情心理：心情の性格、発生過程、交流様式及び形態、」韓国心理学会誌、一般 18 巻　1 号（1999)：4.　以降、内容はこの論文を参考にして整理した。

狭い意味である。英語の mind は reason と passion を全て含むが、韓国文化の中で「心」は passion に近い。すなわち心情というのはある対象に対して発動された「感情、気持ち、意志、関心、意向」等を含む心の状態で、単純な「考え(thinking)」と区分される。言い換えれば心情はある対象に対して発生した情緒的側面と動機的側面全てを含む心の状態として主観的な心理経験だ。そういう心情の発生の基底にはある欲求や動機が前提になっていて、その欲求や動機の成就または挫折によって、心情が発動する。すなわち心が動く。

ところで韓国文化の中で心情の重要性は個人の内面にそういう心理的経験が発生するという事実でなく、韓国人の対人関係や社会生活がこのような意味の心情に大きく基づいているという事実だ。韓国人は外的な行動を行動それ自体で評価するよりは行動をその行動の背後にある発動する心の量や質に転換して、評価する傾向が高い。特に近い人々の関係において相手の胸中で起きる真の心的経験を自身の経験で共感しながら、これを配慮して、行動するのをとても重要に考える。この時交流し、共感される主観的な心的経験の内容がまさに発動された心、すなわち心情だ。韓国人により重要なのは行為の交換でなく心情の交流である。

韓国文化で心情の交流はよく非言語的方法で成り立つ。心情の交流に言語が入れば「心情」でない「考え」または「真実な心」でない「仮装された心」が入る可能性があるためだ。従って韓国文化の中で最も理想的な心情交流の方法は「以心伝心」の方法である。以心伝心の心情交流が最もよく起きる集団は家族である。韓国文化の中で家族間の関係では常に「相手が外的に明らかにしない心情を注意深く読んで、これに伴って敏感に反応する心情交流様式」が非常に発達している。相手の心情を読むということは相手方の心情を自身の心情で体験するのである。相手の喜びを自身の喜びとし、相手の痛みを自身の痛みで経験するのである。心情の交流は相手の心情が私の心情でまた私の心情が相手の心情でそのまま転移して感じられるのである。このような心情交流を通じて、相互心情が結束した一心同体の関係が形成される。韓国社会で「私たち(we)という意識(we-ness)」はこのような心情の関係に基づいて形成される。心情というのはその本質上関係的なのである。[3]

心情交流が常に以心伝心の形態で起きるのではない。その他の心情伝達通路と方式を使うこともできる。例をあげれば頭を撫でる行為、手を握る行為、ため息をつく行為らは相手に自身の心情を伝達する通路である。「韓国社会ではたとえ定形化されていなくても[心情の解釈のため]暗黙的な形態の解釈の枠組みが非常に繊細に発達している。」また言語的方法を通じても心情の交流が可能である。しかしこの時にも言語の辞書的意味よりはその言語の発話者の心の動機が心情伝達のためにさらに重要だ。韓国文化で近い人々の間の対話は互いに相手の心情を感じながら、互いに相手の心情を配慮する「心情感応的」対話なのである。

---

[3] チェ・サンジン、キム・ジョンウンはこの点を強調する。チェ・サンジン、キム・ジョンウン「“Shim-chaong” Psychology as a Cultural Psychological Approach to Collective Meaning Consturction」韓国心理学会誌：社会と性格.12 巻　2 号（1998）：86.

3.原理講論の中の心情の意味と根源的衝動との関係

すでに「原理講論に現れた心情の表現は韓国的な意味としての心情か、そうでなければ統一思想要綱で定義した専門用語としての心情なのか」という質問に対する答えを探してみよう。筆者の観察によれば原理講論で使われる心情の意味は韓国文化の中で使われている意味としての心情と相通じる。すなわち、原理講論は「真実の心」または「真実の深い動機と感情」という意味の心情を使われており、更に心情と心情の交流と共体験を強調してそれに基づいた関係性を強調する。

いくつかの例を考えてみよう。人間は神様の心情を共感することによって神様と一体にならなければならない。第 1 祝福完成というのは人間が神様の心情を共感することによって神様の思い通り生きるということを意味する。[4]　人間が神様の心情を推し量って配慮できると、人間は神様が何を望んで何を望まないかを知って生活することになる。神様がいつ喜んでいつ悲しむかを知ることになるからだ。しかし人間先祖の堕落以後神様は苦痛と悲しみと恨の心情を持つようになられた。従って人間がその心情を共感する時、人間は神様の復帰摂理のみ意を完成させて差し上げるために最善を尽くすことになるだろう。神様の心情は人類という子供に対する父母の心情で集約されて描写される。

原理講論はまたイエス様の悲しみとくやしさと苦痛の心情をいう。[5]　そして人類がその心情を推し量って共感しながら、その心情を解怨して差し上げることをいう。原理講論は摂理的中心人物らの心情に対しても重く扱っている。神様と中心人物間の関係においてより重要なのは神様に対する中心人物の真実の心すなわち心情だ。これらの心情は復帰摂理を前進させる重要な基台になったりもする。例をあげれば神様に対するアブラハムの心情、モーゼの心情、ヨシュアの心情などは神様がその次の段階の摂理をされる基台にされた。更に原理講論は万物との関係にも心情的関係が本来の関係であることを強調する。神様の万物に対する心情を感じて、人間も同じ心情で万物に対さなければならないのである。人間が心情を中心に万物に対する時、人間は万物に対する知識も、より完全に持つようになる。[6]

このように原理講論で使われる心情の概念は韓国文化の中で使われる心情の概念と相通じている。ただしその適用対象が拡大して、神と人間と万物の間の関係で心情交流を通した一心同体を含むことになる。これは原理講論の独特な思想の中の一つである。韓国文化の中で人間と人間の関係で発生する心理的経験の心情を、神様と人間、人間と万物の間の関係にも適用している。神と人間と万物が互いに心情をやりとりすることができる間に規定されている。人間は神様を単純に信じるのではなく、神様の深い心情を推し量って共感して一体になって神様と公明な生活を送らなければならない。また心情が互いに共感でき

---

[4] 世界基督教統一神霊協会、原理講論（ソウル：成和社、1995)、第１章　３節
[5] 原理講論、第４章
[6] 原理講論、第１章　３節

る時「私たち」という家族的一心同体意識が生まれ、これが拡大すれば神様を中心とする天宙大家族の意識で発展する。

それなら「愛を通じて喜びを得る静的衝動」は上述のように理解された心情とどのように連結しているだろうか? そういう根源的衝動はまさに心情現象の基盤だと理解することができる。すなわち心情現象はそういう根源的衝動があるから発生するということだ。[7] 上述した心情現象を注意深く調べれば心情的人間関係はすでに愛に基づいていると見られる。相手方の心情を推し量って共感しながら、それを配慮して、行為しようとするのはまさに愛の態度だ。難しい心情を持った者に対して同情心を持つのも愛の姿だと見ることができる。言い換えれば心情的人間関係の最も根底には「愛を通じて喜びを得る静的衝動」が置かれているのだ。順序を変えて表現するならば、人間は自身の最も根源的欲望の「愛を通じて喜びを得る静的衝動」の発露で他人の心情を共感しようと思いつつ、共感できた心情を尊びたいのである。また自身の心情が共感を受けることを望み、配慮されることを望むのである。

ところでこのような根源的衝動は韓国文化の中の心情のある形態で表出されると理解することができる。すなわち愛したい欲望とその結果として喜びを得るという欲望は愛の心情、喜びを得ようという心情で現れるということだ。ただしその心情は全ての心情現象を起こす根源的心情だ。その根源的心情を充足させようと思う努力、そしてその心情が満たされたり、挫折した時、発動される感情が交感されながら心情現象を起こす。原理講論でいう心情はまさにこのような根源的な「愛の心情」を土台にしながら、それを含んでいることで理解することができる。こういう意味で、原理講論でいう「心情文化」を「愛の文化」と表現することもできるだろう。しかし必ず愛に基づいた心情の共感と家族的一心同体意識を含んで理解してこそ原理講論が「心情文化」という表現で現わそうという意味全体を理解できる。言い換えれば本来の心情文化というのは神と人間と万物が愛の発露でお互いに対する深くて真実なる胸の内を感じ、すなわち心情を特に以心伝心で交感しながら、一つに和動する文化だ。

4. おわりに

これまで論じた通り、原理講論で使われる心情の意味は韓国文化の心情の意味と連続線上に立っている。ただし同じパターンでもそれの適用範囲がはるかに拡張されて信仰的意味が加えられる。筆者はこの意味が家庭連合全般で使われる意味と考える。統一思想要綱で定義する「愛を通じて喜びを得る静的衝動」というのは上述のような心情現象を起こす根源的欲望として「愛の心情」で表出される。このような根源的衝動または愛の心情は明

---

[7] 上述した通り、心情の発生の基底にはある欲求や動機が前提にされていて、その欲求や動機が成就するかまたは挫折するかによって心情が発動する。統一思想の観点から見る時、最も根底になる動機は愛を通じて喜びを得る情的衝動である。

確に家庭連合の思想の中で窮極的に人間を動かす根源的本性だ。しかし、これまで論じた心情の意味を全てまとめるには多少狭く定義されているようだ。従って心情を説明する時は統一思想要綱の心情の意味にだけ留まらずに原理講論で使われる心情の意味を加えて説明する必要がある。